

中学社会科におけるアクティブ・ラーニング (I)

—生徒の日常にある歴史を読み解く—

宮本 英征 栗谷 好子 池野 範男 伊藤 直哉
草原 和博 具志堅 加奈 橋本 浩 藤原 隆範

1. はじめに

本継続研究の目的は、中学社会科におけるアクティブ・ラーニングを班活動や発表などの生徒の外形的な活動に留めるのではなく、学びの資質を深める活動として組織する方法を明らかにすることである。

本年度は、歴史に対する学びを深めるアクティブ・ラーニングを実践するために、歴史の取り扱いをどのように変化させることができるのかを解明する。

中学社会科歴史的分野において、生徒は歴史教科書を中心にして学ぶことが一般的である。例えば、教科書¹⁾の小項目「摂関政治」は、平安時代における律令政治の確立、藤原氏の台頭、摂関政治の成立、藤原道長・頼通の繁栄、地方の混乱を中心とする内容となっている。授業は教科書に提示されている藤原氏の系図や菅原道真の左遷についてのエピソード、道長がよんだ和歌「この世をば」を教材にしながら教科書の内容を理解させる。このような知識・理解型の授業を克服するために、アクティブ・ラーニングに関する先行研究では、学習課題（発問）が重要であり、学習課題によって生徒が興味を持ち主体的に班活動や調べ学習に取り組むことができることを論じている²⁾。例えば、乾正学は、学習課題「次の資料は、道長の人物像を表しています。彼の性格や心情を読み取ってみましょう。」を提示し、藤原行成の日記や御堂関白記、栄花物語を分かりやすく示した資料を生徒が読み解く。そして、小集団での情報交換や全体発表を行う。最後に、教師が、道長の宗教意識を視点にして、生徒の回答を3段階で

評価できるようにしている。また、堀口健太郎は、藤原氏が権力を持った背景を調べるために「クイズで“事実を確認する”発問」「“事実の深読み”調べ発問」を提示し、生徒は教科書の内容を確認したり調べたりする。そして、「アクティブ・ラーニングに発展する発問」を行う。その発問は「摂関政治が行われる中で天皇はどのような思いであったか班で考えよう」「藤原氏が大きな力を持った背景を荘園の資料から読み取りまとめよう」「摂関政治の時、地方政治がどのような状態であった資料から読み取ろう」になっている。

このように先行研究はアクティブ・ラーニングにおいて「学習課題（発問）」の大切さを示している。しかし、生徒の班活動や調べ活動は生徒の主体性に任される。また、学習課題に対する生徒の回答は、教科書や資料に示される歴史、言い換えると、正しい解答があり、その解答を表現を変えて答えているに過ぎない。歴史に対する学びとしては、従来と変わらず、客観的な事実や知識を学習させているに過ぎない。そのため、生徒は学習した歴史を否定できないし、多様な意見も尊重できない。アクティブ・ラーニングが目指す主体的・対話的で深い学びを実際には実現できていない。

そこで、本研究では、科学的・実証的とされる歴史だけでなく、生徒の日常にある歴史を歴史学習では取り上げることができること³⁾、そして、生徒と生徒、生徒と教師が協力して歴史に対する学びの資質を向上できることを示し、単元「藤原道長に返歌を送ろう」の実践の様子を示す。そして、歴史授業における歴史の取り扱いをどのように変革できたかを明らかにする。

Hideyuki Miyamoto, Yoshiko Awatani, Norio Ikeno, Naoya Ito, Kazuhiro Kusahara, Kana Gushiken, Hiroshi Hashimoto, Takanori Fujiwara,

:Active learning in junior high school social studies (I) — Reading of the history in the daily life of the student

2. 歴史授業における歴史の取り扱いの変革

(1) 歴史授業における歴史

歴史授業における歴史は、教科書の内容になることが一般的である。教科書の歴史は事実として、あるいは、客観的な知識として教師も生徒も認識する。しかし、歴史教科書には執筆者がいる。歴史教科書は、執筆者が正しい、あるいは、最も真実に近いものと判断して記述している。歴史教科書は客観的な事実や知識ではなく、執筆者によって変化する主観的な記述といえる。また、歴史授業では資料として歴史学者の著書やその内容を分かりやすく簡略化したもの、図化したものを使用することも多い。歴史学者の著書やその著書に基づく記述や図は、科学的実証的な知識として扱われる。しかし、歴史学者の著書は歴史学者が最も真実に近いものと判断して記述している。教科書と同様に主観的な記述である。一方で、日常生活では、テレビや映画、小説や漫画からも生徒は歴史を認識する。日常生活で生徒が認識する歴史は、科学的実証的ではなく、他者の価値観が結びつく主観的な歴史として考えられ、歴史教育で取り上げることに慎重になる場合が多い。しかし、教科書も歴史学専門書もテレビや小説、漫画における歴史も他者の価値観が結びつく主観的な歴史である。そのように考えると、歴史授業においては、テレビや映画、小説、漫画など日常生活に存在する歴史を教科書と同等に取り扱うことができることになる。

例えば、藤原道長について教科書³⁾は「摂関政治は11世紀前半の藤原道長とその子頼通のころに最も栄えました。」と記述し、資料として「この世をば」の歌とその解釈を載せている。歌の解釈は「この世は私のための世界のように思える。まるで満月の欠けたところがないように、満ちたりた思いがするのだから」となっている。教科書の記述「摂関政治は」「最も栄えました」と歌の資料「この世は私のための世界のように思える」によって、教科書執筆者は道長を摂関政治を典型的に行った人物としてではなく、摂関政治によって権力を握った人物として考えていることが分かる。また、教科書執筆者が道長を肯定的・否定的のどちらに捉えているかは不明であるが、教科書の記述と歌の資料により、本校中学1年生のほとんどは、道長を傲慢な人物

としてイメージした。

歴史学者や歴史小説家も藤原道長について記述する場合、和歌「この世をば」を取り上げることが多い。しかし、彼らの著書においても、道長のイメージは全て同じではない。

歴史学者である古瀬奈津子は、著書の『摂関政治』（岩波新書、2011）において、摂関政治が藤原道長によって新しい政治へと発展したことを次のように記述する。

「奏事」の成立によって、摂関・内覧の地位が他の公卿たちとは違うことを明らかにしようとした道長ではあるが、それは逆に言うと、それまでの公卿たちの地位、すなわち公卿を含む太政官という政治機関が強大な機能をもっていたことを示している。太政官制においては、前述したように本来太政官を経ることなく天皇へ奏上することはできないしくみになっていた。太政官をとばして天皇へ奏上して、天皇と摂関・内覧で物事を決めてしまう「奏事」は、この機能をそぐという意味で画期的な政務方式であった。（古瀬、2011、p47.）

古瀬は道長を外戚政治を最も拡大させただけでなく、奏事という「画期的な政務方式」を創り出した人物として記述し、道長を政治力の高い人物として肯定的に評価している。

また、同様に歴史学者である臈谷寿は『さかのぼり日本史⑨平安 藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか』（NHK出版、2012）において、当時としても異例な道長の外戚政治について、次のように述べている。

そのおかげで道長から摂政を譲られた頼通は、半世紀にわたり、摂政・関白の座に居続けることになります。（略）では、なぜ道長はこれほどまでに外戚と摂関の座に執着したのでしょうか。もちろん、藤原北家に生まれた道長は、持って生まれた藤原氏の権勢欲というものを持ち合わせていたのかもしれない。しかし、もう一つの重要なファクターとして、道長自身が非常に病弱だったということを描きたいと思います。（略）病弱であるということは、将来への不安が常に付きまとうものです。だからこそ、先を見越した処置をする。（臈谷、2012、pp. 51 - 52.）

臈谷は「道長自身が非常に病弱だった」ため、藤原北家や息子に対する「将来への不安」があり、「頼通は、半世紀にわたり、摂政・関白の座に居続ける」ことができるように「先を見越した処置をする」と記述する。道長が自分自身に対する不安とともに藤原北家や息子の将来も心配していることを強調している。臈谷は病気を気にする気弱なイメージとともに息子を気遣う優しさのイメージを道長に結びつけていると考えることができる。

以上のように、歴史学者においても異なる価値観が道長に結びつくことが分かる。さらに、小説家の永井路子は『この世をば（上）（下）』（新潮文庫、1986）において、傲慢である道長像を否定し次のように記述する。

夜が更けるにつれて月の光いよいよ冴えてきた。平凡児らしい気のつかい方で、何とかここまで辿りついてきた彼の、いささか照れくささの入りまじった満足感ぐらひは、まず認めてやってもいいのではないか。

じじつ、この夜の歌は、彼としてもほんの座興のつもりだった。そのせいか、彼の栄華をたたえてやまない『栄花物語』もこの歌は載せていないのである。（略）そして、千年近く経たいま、三十一文字は、道長の照れたような笑顔をふりおとし、それ自身傲岸に不遜にふくれあがり、歴史を覆ってしまった。

（永井、1986、〈下〉pp. 454 - 455.）

永井は一家三后を果たした道長を「平凡児らしい気のつかい方で、何とかここまで辿りついてきた」と評し、「この世をば」の歌を「彼としてもほんの座興のつもりだった」とした。そして、「道長の照れたような笑顔をふりおとし、それ自身傲岸に不遜にふくれあがり、歴史を覆ってしまった」として、傲慢な道長のイメージを否定している。永井は道長を幸運な平凡児というイメージを結び付けて記述をしていると考えることができる。

まとめると、藤原道長に関する歴史教科書の内容は客観的な事実や知識ではなく、執筆者の主観的な記述である。そして、科学的実証的とされる歴史学者の道長についての記述は歴史学者の価値観によって多様に変化する。この結果、主観的な歴史という観点では、道

長を描いた歴史小説は歴史教科書と歴史学者の記述と同等であり、歴史授業でも取り扱うことができる。歴史授業において、藤原道長について教科書や歴史学者の著書やその著書に基づく記述や図だけでなく、生徒が日常的に認識する歴史小説や漫画における道長を扱い、客観的な事実や知識であった道長に関する歴史を主観的な記述として学習する。そうすることで、生徒は道長のイメージについて改めて価値判断を行い、自らが記述できるものとして学ぶことが可能となる。

（２）向上主義に基づく学び

前節で説明したように、歴史授業において、歴史小説など生徒が日常的に認識する歴史を扱うことで、歴史を客観的な事実や知識ではなく、主観的な記述として学習することが可能となる。そのためには、事実や知識とされてきた歴史的記述を言説分析し、その記述に結びつく他者の価値観を顕在化する。そして、生徒自身が価値観を判断し、改めて記述したものを歴史として評価することが必要である。そこで、生徒が価値判断を行い歴史を記述するために、トゥールミン図式を活用する。そうすることで、生徒と生徒、生徒と教師が協力して、歴史を学ぶ資質を向上することができる。と考える。

例えば、前節で提示した古瀬、永井、臈谷の記述を、トゥールミン図式を活用して言説分析した場合の学びの構造を示したものが表1である。

古瀬の記述の場合、生徒はAのように学習することができる。すなわち、古瀬の「この世をば」の場面についての記述が、外戚を基調とした摂関政治が極まったことの象徴として紹介されていることを理解する。しかし、古瀬は道長の外戚政治とともに、道長が摂関ではなく左大臣と内覧という地位を重視したこと、さらに、奏事という新しい政治の仕組みを創ったことを評価していることを読み解く。そして、古瀬が政治力の高い藤原道長のイメージを記述に結びつけていることを解明する。

臈谷の記述の場合、生徒はBのように学習することができる。すなわち、臈谷による「この世をば」の場面についての記述が、外戚の地位が長期化することを喜んだことを強調するため紹介されていることを理解する。そし、

表1 トゥールミン図式を活用した学びの構造

| | | | | |
|---|-------------------|----------------------------------|---|-------------------------------------|
| A | 古瀬の道長像 | 古瀬奈津子『撰関政治』 | → | この世をば わが世とぞ思う 望月の かけたることも なしと思えば |
| | | どのような目的で道長の歌を紹介したのか。 | | |
| | | 外戚を基調とした撰関政治の最盛期のイメージ | | |
| | | なぜ、そのようなイメージを強調したのか。 | | |
| | | 藤原道長は政治能力が高い。 | | |
| B | 隴谷寿『さかのぼり日本史』の道長像 | 隴谷寿『さかのぼり日本史』 | → | この世をば わが世とぞ思う 望月の かけたることも なしと思えば |
| | | どのような目的で道長の歌を紹介したのか。 | | |
| | | 藤原道長は外戚の地位が長期化することを喜んだことを強調するため。 | | |
| | | なぜ、「外戚の長期化」を強調したのか。 | | |
| | | 藤原道長は息子のために思う優しい人物だった。 | | |
| C | 永井の道長像 | 永井路子『この世をば』 | → | この世をば わが世とぞ思う 望月の かけたることも なしと思えば |
| | | どのような目的で道長の歌を紹介したのか。 | | |
| | | 藤原道長が照れながら座興でよんだことを強調するため。 | | |
| | | なぜ、座興だったことを強調したのか。 | | |
| | | 藤原道長は幸運な平凡児である。 | | |

て、隴谷が「外戚の長期化」を強調した背景に道長が病弱であり、自身への不安や息子の将来を心配していることを読み解く。最終的に、隴谷が道長の気弱さや頼通への優しさをイメージしていることを解明する。

永井の記述の場合、生徒はCのように学習することができる。すなわち、永井による「この世をば」の場面についての記述が、これまでの傲慢な道長像を批判し、座興としてよんだ道長の単純な喜びを記述していることを理解する。そして、永井が道長の単純な喜びを強調していることを読み解く。最終的に、永井が幸運な平凡児であるという道長のイメージを記述に結びつけていることを解明する。

このように、3名の記述を言説分析し、結びつく多様な価値観を顕在化する。そうすることで、教科書の記述からイメージした傲慢な道長像を反省し、生徒が道長に結びつくイメージや価値観を再構築し、自らの言葉で道長について語る。このような学びを繰り返すことで、生徒は自分自身の語り歴史であると

認識できるようになると考える。

(3) 本章のまとめ

本章においては、第1に、藤原道長を取り上げ、歴史教科書や歴史学者の著書における歴史と日常的なテレビや小説などの歴史は、主観的な歴史として同等であることを明らかにした。そして、第2に、事実や客観的知識であった藤原道長の政治や出来事を主観的な記述として認識することで、生徒が道長について価値判断し改めて記述できることを示した。そのためには、第3に、授業においては、科学的学問的な道長についての文献だけでなく、生徒の日常にある小説や漫画、テレビや映画の道長を取り上げ、言説分析を行うことで、歴史を主観的なものへ変革できることを明らかにした。第4に、言説分析は、トゥールミン図式を活用することで、生徒と生徒、生徒と教師が道長に対する学びを向上できることを示した。

3. 単元「藤原道長に返歌を送ろう」の実際

本単元は中学1年生の歴史的分野の小項目「摂関政治」を3時間のアクティブ・ラーニングの単元として組織した。本単元における歴史に対する学びの資質は、教科書や歴史学者の記述を客観的なものから主観的なものへ転換し、生徒が藤原道長について記述したり語れたりする資質である。そのため、具体的な目標を次のようにした。

- ① 摂関政治における権力者として藤原道長を説明するだけでなく、道長の平凡さなどの人間性を踏まえ、肯定的あるいは否定的にそのイメージを判断し、生徒自身の道長像を語るができる。
- ② 「この世をば」についての教科書だけでなく、他者の多様な語りを分析することで、道長に多様なイメージが結びつくことに気がつかせる。他者による語りは教科書だけでなく、小説など日常生活において生徒が歴史を認識するものを扱う。
- ③ 藤原道長に対するイメージを判断し、「この世をば」に対する返歌を作成し班やクラスに発表する。また、返歌や作成した理由を評価基準に基づいて自己評価・他者評価する。さらに、評価基準そのものを反省させる。

そして実際に、2016年10月13日に1時間目を、18日に2時間目を、19日に3時間目を表2のように広島大学附属中学校1年生（43名）に実践した。

1時間目は専門書や小説に隠された著者の藤原道長に対する肯定的なイメージを明らかにすることで、大部分の生徒がいただいている傲慢な道長のイメージを反省させた。前半では、教科書に示された和歌「この世をば」からイメージした道長像を確認し、漫画（山本博文監修（2015）『角川まんが学習シリーズ 日本の歴史3』KADOKAWA, pp.162 - 163.）に示される道長を提示し興味をもたせた。そして、漫画の場面がどのように記述されているかを、古瀬の『摂関政治』（古瀬，2011，pp.44 - 45.）を資料にして朗読させた。その後、ツールミン図式を用いながら古瀬の道長像を読み解かせた。道長の新しい政治を示す図（古瀬，2011，pp.46 - 48.）を示し、道長が内覧と左大臣を兼任するという権力掌握のために効果的な選択をしただけでなく、奏事という新しい政治のしくみをつくったことなどを理

解させた。そして、古瀬がイメージしている道長像を考えさせた。複数の生徒に質問することで、道長の優秀さや政治力の高さを評価する古瀬のイメージを引き出した。後半では、生徒が日常生活で取り扱う小説を言説分析した。永井の『この世をば（下）』における和歌「この世をば」を読み上げる場面（永井，1986，＜下＞，pp.451 - 455.）を朗読させ、作者がどのように道長をイメージしているか、ツールミン図式を用いながら読み解かせた。著者が照れながらよみあげる道長を強調していることを理解させ、なぜ、永井が道長が照れていることを強調しているのかを、「藤原道長出世ゲーム」で考えさせた。このゲームは、生徒がひいたカードの条件、例えば、【はしかが流行】のカードには、教師とじゃんけん→勝ち（無事）で位階が二つ出世、あいこ（すこし休む）で現状維持、負け（大病）で位階が二つ降格、のように、平安時代の貴族の出世の偶然性を体験できるものであり、道長が兄弟の偶然の死によって家長になったことなども実感できるものである。ゲームによって出世する道長を体験することで、道長の運の良さを実感させ、小説家の永井がイメージする道長像を考えさせた。この結果、永井が道長を運のよい人物としてイメージしていることなどを生徒から引き出せた。最後に、生徒の多くがこれまでの傲慢な道長のイメージを反省できたことを確認した。このように、1時間目は主に教師と生徒が対話しながら、道長に関する歴史が歴史学者や歴史小説家の記述であり、その記述には著者のイメージや価値観が結びつくことをツールミン図式を活用した言説分析を行った。

2時間目は道長の優しさをイメージさせる資料を読み解き、これまでの学習を踏まえて生徒自身の道長像をつくった。そして、道長の和歌「この世をば」に対する返歌を作成した。前半では1時間目に分析した優秀な道長像や運が良い道長像についてツールミン図式を示しながら復習した。そして、道長が和歌「この世をば」を詠んだ時期を考えさせた。摂政就任や長女の入内でもなく、三女威子の入内の時に詠んだ理由を考えさせた。そして、臈谷の『さかのぼり日本史⑨平安 藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか』（臈谷，2012，pp.

表2 単元「藤原道長に返歌を送ろう」の授業実践

| 時間 | 主要な発問 | 資料 | 教師と生徒の活動 | 学習内容 |
|-----------------|---|---|---|---|
| 1時間 前目 前半 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 摂関政治の代表的な人物は誰だったか。 ・ 藤原道長はどのような歌を詠んでいたか。 ・ 前回確認したけど、この歌の印象は多くの人是否定的だったよね。 ・ 今日は漫画の「この世をば」を読んでみよう。 ・ 漫画の「この世をば」は何を強調しているか。 ・ この場面はどのように記述されているか、読んでみよう。 ・ この資料では、和歌を読んだ道長をどのような人物として説明しているか。 ・ 「摂関政治の最盛期」を強調しているが、実際にどうなのか？教科書の系図の道長で不思議に思うことはないか。 ・ 道長は摂政にはなっているけど、1年あまりで息子に譲ってる。 ・ 資料③は諸国から要望があったときの政治の方法をしめしています。Aが一般的なものです。太政官で普通、最終決定権があるのは、どの役職ですか。 ・ 摂関は太政官の決定案を天皇に示すかどうか選択権があります。天皇の決定に対しても、選択権があります。摂政と同じ権利を持っているのが内覧です。道長は29歳から20年あまり内覧につきます。 ・ なぜ、摂関にならなかったのか。 ・ 実は道長は左大臣にも就任しています。摂関の職は太政官の職と兼任できないために、摂関にはつかず、内覧についたわけだね。 ・ つまり、道長は政治的にはどのくらいの権限を得ていたのか。 | <ul style="list-style-type: none"> ① ② ③ | <ul style="list-style-type: none"> T発問する S答える T発問する S答える T確認する T資料を配布し発問する S読む T発問する S答える T資料を配付し発問する S読む T発問する S答える T発問する S答える T説明する T資料配布し発問する S答える T説明する T発問する S答える T説明する T発問する S答える | <ul style="list-style-type: none"> ・ 藤原道長。 ・ 「この世をば…」 ・ 摂関政治の頂点。 ・ 摂関政治の最盛期をもたらした人物。 ・ 関白にはなっていない。 ・ 左大臣。 ・ ……。 ・ 太政官まで握っていた。 |

| | | | |
|---------------------------------|---|--|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・道長はさらにB「奏事」のしくみに変えていきます。Bになって権限を失うのは。 ・力が増すのは。 ・摂関政治の最盛期を強調することで、資料の作者は道長に対してどのようなイメージを持っていたのだろう。 ・このことを図にします (トゥールミン図式は略) | <p>T発問する S答える</p> <p>T発問する S答える</p> <p>T発問する S答える</p> <p>T説明する</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・太政官。 ・摂関，内覧。 ・道長は政治力がある，優秀であることを誇った。 |
| 1 時 間 目 ・ 後 半 | <ul style="list-style-type: none"> ・では，この小説を読んでみよう。 ・道長の印象がずいぶん違うと思うけど，どこが違いますか。 ・なぜ，作者は照れている点を強調したのだろうか。 ・次の【藤原道長出世ゲーム】をして考えてみよう。 ・道長が出世できた理由の一つは何だろう。 ・作者は照れている道長を強調していることから，道長をどのような人物だとイメージしていたのだろう。 ・このことを図にしてみよう。 ・藤原道長に対する新書や小説の作者のイメージについて考えてきました。みんなのイメージも大きく変化したようですが，どのように変化しましたか。 | <p>④ T資料を配布し 発問する S朗読する T発問する S答える T発問する S答える</p> <p>⑤ T配布しゲーム をする Sゲームをする T発問する S答える T発問する S答える</p> <p>T発問する S図にする T発問する S答える</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・照れている。 ・ ・運が良かった。 ・幸運な平凡児，運が良かったこと。 ・ (トゥールミン図式は略) ・優秀であった。運が良かった。 |
| 2 時 間 目 ・ 前 半 | <ul style="list-style-type: none"> ・新書や小説の作者のイメージについて再度，図にしてみよう。 ・では，藤原道長が「この世をば」を詠んだのはどの時期だろう。資料から答えよう。 ・なぜ，初めて摂政になったときや1人目の娘の結婚の時ではなく，この時なのか。 ・この資料を読んで考えよう。 ・この資料の作者は「この世をば」 | <p>T発問する S図にする T配布し発問する S答える T発問する S答える</p> <p>⑥ T配布し発問する S朗読する T発問する</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ (略) ・ (3人目の威子が結婚した時期を選んだのは半数くらいであった) ・ ・道長は息子や藤原家が長く天皇のおじ |

| | | | |
|---------------------------------|---|--|---|
| | <p>をうたった道長のどのようなイメージを強調しているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 作者は、なぜ、将来にわたって息子や藤原一族が天皇のおじいさんとなれることについて道長が喜んだことを強調したのだろう。 ・ このことを図にしてみよう。 ・ これまで、3人の作者の道長のイメージを考えてきましたが、みんなのイメージはどのようになりましたか。 | <p>S答える T説明する T発問する S答える</p> <p>T発問する S図にする T発問する S答える</p> | <p>いさんになれることを喜んでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 道長は病弱であり、気弱な面があるだけでなく、息子や「家」のことを心配している。やさしい人物。 ・ (トゥールミン図式は略) ・ やっぱり傲慢。運がよい。いろいろなイメージが融合。 |
| 2 時 間 目 ・ 後 半 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 道長は「この世をば」を詠ったとき、藤原実資に返歌を求めているので、実資になって、道長に対する返歌を考えてみよう。 ・ 特に、「この世をば」をうたった道長をどのようにイメージするか。そのイメージに基づいて返歌を考えてみよう。 ・ 例えば、私なら「おもいがけず、つらい浮世でも、生きていけば、きっと思い出す、この美しい月を」。解説すると「このつらい世の中をがんばって生きていけば、あなたと見た今夜の美しい満月を私は思い出すときもあるでしょう。」とちょっと嫌味な返歌。(三条天皇の和歌「心にも あらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな」を下地にしていることを伝えてもよい) | ⑦ T配布し提案する S作成する T補足する T事例を示す | <ul style="list-style-type: none"> ・ (略) |
| 3 時 間 目 ・ 前 半 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 班で発表する。良いものを選び、全体に紹介する。 ・ 道長の否定的なイメージが変化したか。 ・ 自分たちがイメージする道長に和歌をつくったように、道長について私達も否定的・肯定的に、自由に説明したり話し合ったりすることができること、それが歴史になることを学習しました。 | <p>T指示する S班で発表する T発問する S答える Tまとめ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ (略) ・ (変化したと手を挙げたものが大部分であった) |
| 3 時 間 目 ・ | <ul style="list-style-type: none"> ○ 事後アンケートに、道長のイメージについて、再度、考えをかこう。 ・ 評価規準を用いて、自分の回答を | ⑧ T事後アンケートを配布し発問する S記述する T発問する | <p>(生徒の活動の様子や生徒がつくった返歌、及び、評価活動の実際は省略)</p> |

| | | | |
|----|---|---|--|
| 後半 | <p>評価してみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜそのように評価したか、理由も書こう。 ・周りの友人にも評価してもらおう。事後アンケートを交換しよう。 <p>○自分の回答を評価した評価規準について、さらに、良い規準にする場合、どのように改善したら良いだろうか。また、評価「6」「7」など、より高い基準を班になって、考えてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのような考えが出たか、発表しよう。 <p>○自分で評価したり、自分たちで規準を考えてみた感想を書こう。</p> | <p>S評価する T発問する S記述する T発問する S交換し評価する T発問する S班になり話し合う</p> <p>T発問する S答える T発問する S記述する</p> | |
|----|---|---|--|

【資料】

- ① 山本博文監修『角川まんが学習シリーズ 日本の歴史3』KADOKAWA, 2015, pp.162 - 163.
- ② 古瀬奈津子『撰関政治』岩波新書, 2011, pp. 44 - 45.
- ③ 古瀬奈津子『撰関政治』岩波新書, 2011, pp. 46 - 48. (図Aは本文中, 図Bは作成)
- ④ 永井 路子『この世をば〈下〉』新潮文庫, 1986, pp. 451 - 455.
- ⑤ 臈谷寿『さかのぼり日本史⑨平安 藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか』NHK出版, 2012。
倉本一宏『藤原道長の日常生活』講談社, 2013。土田 直鎮『日本の歴史〈5〉王朝の貴族』中央公論新社, 2004。古瀬奈津子『撰関政治』岩波新書, 2011, から作成。
- ⑥ 臈谷寿『さかのぼり日本史⑨平安 藤原氏はなぜ権力を持ち続けたのか』NHK出版, 2012, pp. 50 - 52.
- ⑦ 藤原道長の年表
- ⑧ アンケート用紙

50 - 52.) を朗読させた。ツールミン図式を利用して、臈谷が外戚の地位を確立する道長を強調していることを理解させた。そして、なぜ外戚の地位に固執する道長を強調したのかを考えさせた。臈谷が、息子への心配や優しさ、藤原氏を心配する道長のイメージをもっていることを検討した。最後に、これまでの道長像の読み解きにより、生徒自身の道長像が多様に変化したことを確認し、自分たちもイメージを判断し道長について記述できること、その記述が歴史になることをまとめとした。後半では、生徒自身の道長像に基づいて、和歌「この世をば」に対する返歌を各自で考えさせた。このように、2時間目は、1時間目と同様に、教師と生徒が協力して歴史学者の記述の言説分析を行うだけでなく、生徒自身で、道長に結びつくイメージを自己判断し、返歌を考えることで主観的に歴史を記述する活動を行った。

3時間目は各自が作成した返歌をグループやクラスで発表させ、評価活動を実施した。前半では、各自が作成した返歌をグループで発表させ、各グループで良いものを選びクラスで紹介した。後半では、藤原道長をどのような人物だと思ったかについて、事後アンケートに答えさせた。その後、評価基準で自己評価させた後、プリントを交換し、他者の回答についても評価させた。その後、6～7人の班になり教師の示した評価規基準の妥当性や改善点、また、新しい評価基準について話し合わせた。最後に評価活動について感想を書かせた。このように、3時間目は、生徒と生徒が協力して、道長のイメージを判断し改めて記述できること、その記述が歴史になることを実際に行った。そして、どこまで歴史を主観的に認識できるようになったかを互いに評価し、今後の学習に対する姿勢や道筋を把握させた。

4. 成果と課題

本研究では、単元「藤原道長に返歌を送ろう」を開発・実践できたことで、以下の点を明らかにすることができた。

第1に、歴史教科書や歴史学者の著書における歴史と日常的なテレビや小説などの歴史は、主観的な歴史として同等であることを明らかにした。

第2に、歴史を主観的な記述として認識することで、生徒の記述を歴史として認識できることを示した。

第3に、授業においては、科学的学問的な歴史だけでなく、生徒の日常にある歴史を取り上げ、言説分析を行うことで、歴史を主観的なものへ変革できることを明らかにした。

第4に、言説分析はツールミン図式を活用することで、生徒と生徒、生徒と教師が歴史に対する学びを向上できることを示した。

この結果、本研究の意義は、中学社会科歴史的分野におけるアクティブ・ラーニングは、歴史認識の在り方を変革し、教科書や歴史学者の歴史を客観的なものから主観的なものへ転換する。そして、生徒自らが歴史を語れるように、学びの資質を向上させる活動となることを示したことである。

しかし、本研究では授業実践における3時間目の評価活動とアンケートによる生徒の学びの実際を示すことができなかった。このため、上述した4つの成果を個々の生徒を事例にして具体的には明らかにできなかった。次年度は、特に、アクティブ・ラーニングと評価活動との関係を明らかにし、個々の生徒の学びの実際を明らかにしていきたい。

註

- 1) 黒田日出男監修『社会科 中学校の歴史』帝国書院, 2016。
- 2) 堀口健太郎「『撰関政治』『撰政・関白』『藤原道長・頼通』」峯明秀編『中学社会科“アクティブ・ラーニング発問”174』学芸みらい社, 2016, p82, 乾正学『中学歴史アクティブ・ラーニング&導入ネタ80』明治図書, 2016, pp.54 - 55。
- 3) 服部一秀「社会の中の歴史に関するメタヒストリー学習の意義ードイツの歴史教科書『歴史と出来事ーテューリンゲン州版』をてがかりに」社会系教科教育学会『社会

系教科教育学研究』第28号, 2016, pp.11 - 20, でも、生徒の日常にある歴史に着目させ、歴史を生徒に再構築させる意義を論じている。本研究は、日常にある歴史と教科書などの学校教育の歴史を対比すること、また、それぞれの歴史に結びつく価値観の段階を踏まえた歴史の再構築の重要性を示す。

- 4) 黒田日出男監修『社会科 中学校の歴史』帝国書院, 2016, p43。

要 約

中学社会科におけるアクティブ・ラーニング（Ⅰ）

—生徒の日常にある歴史を読み解く—

本研究の目的は、歴史に対する学びを深めるアクティブ・ラーニングを実践するために、歴史の取り扱いをどのように変化させることができるのかを解明することである。

このため、科学的・実証的とされる歴史だけでなく、生徒の日常にある歴史を歴史学習では取り上げることができること¹⁾、そして、生徒と生徒、生徒と教師が協力して歴史に対する学びの資質を向上できることを示し、実際に、単元「藤原道長に返歌を送ろう」を開発・実践したことを説明した。

この結果、本研究の意義として、中学社会科歴史的分野におけるアクティブ・ラーニングは、歴史認識の在り方を変革し、教科書や歴史学者の歴史を客観的なものから主観的なものへ転換する。そして、生徒自らが歴史を語るように、学びの資質を向上させる活動となることを示すことができた。

Active learning in junior high school social studies (I)

— Reading of the history in the daily life of the student —

A purpose of this study is to elucidate it how you can change the handling of the history to practice active learning to deepen learning for the history.

Therefore, what can take up the history in the daily life of the student by the history learning as well as the history told to be like scientific proof, and ,I show that a student, a student and a teacher cooperate with a student and can improve nature of the learning for the history,and ,I really practiced a class.

As a result, as significance of this study, the active learning in the junior high school social studies historic field revolutionizes attitude of history recognition,and I switch the history of a textbook and the historian from an objective thing to a subjective thing,and I was able to show that it became the activity to improve nature of the learning so that student oneself could recite the history.